訴が少なく，術後の QOL の向上に有用であった．リンパ節転移程度からすると，大網温存術はA領域の早期胃癌には適応できるがM領域の早期胃癌に対してはさらに検討を要する．

28）2群リンパ節転移を伴った大腸腺腫内癌の1例

角南　栄二・伊賀　芳朗（厚生連村上総合病院外科）
村山　裕一・清水　春夫
岡田　貴幸・飯合　恒夫（新潟大学第一外科）

今回我々は2群リンパ節転移を伴った大腸腺腫内癌の1例を経験したので報告する．症例は67歳男性．大腸癌検診で異常を指摘され注腸及び大腸内視鏡検査にて盲腸にⅠ型進行癌，S状結腸に $\phi$6 mm の Ⅱa 癌，上部直腸に $\phi$3 mm の Ⅱa 癌を各々認めた．S状結腸及び上部直腸の腫瘍は内視鏡的に切除し，病理組織学的にいずれも腺腫内m癌であった．後日盲腸Ⅰ型進行癌に対し3群リンパ節郭清を伴う右半結腸切除術を施行した際，触診にて直腸傍及び下腸間膜動脈リンパ節の腫脹硬化を認めたため，3群リンパ節郭清を伴う低位前方切除術を付加した．病理組織学的にも2群リンパ節の転移陽性を認めた．盲腸Ⅰ型進行癌は深達度 ss で，所属リンパ節に転移を認めなかった．

29）新潟県における高齢者胃癌の現状

佐々木壽英・佐野　宗明
梨本　篤・筒井　光廣
土屋　喜昭・牧野　春彦（新潟県立がんセンター外科）
田中　乙雄

昭和47年から平成2年まで19年間にわたって，新潟県の胃癌手術例調査を行ってきた．この間，県内症例として30,378例の登録数を数え，98％という高い登録率が得られた．ご協力に心から感謝する．胃癌手術例は昭和47年の1,273例から昭和61年の2,590例まで増加し，以後横這いである．本調査の最終報告として，胃癌の高危険群である高齢者胃癌の現状について述べる．手術例の増加が最も著しいのは70歳代であり，平成2年には675例を数え，昭和47年の4倍以上に増加した．70歳代の早期胃癌率，切除率の推移などについて述べ，今後の高齢者胃癌対策について検討を加える．

平成3年から新潟県の地域がん登録が開始されたため，この胃癌手術例調査は地域がん登録に移行することとした．地域がん登録における胃癌手術例登録数は平成3年1,473例，4年1,659例である．胃癌手術例で約800例から1,000例の未登録症例があるものと推定される．地域がん登録へのご協力をお願いする．

30）帯状疱疹合併消化器癌の検討

星山　圭鉉（柏崎中央病院外科）
星山　真理（同　内科）
武藤　一朗・鈴木　茂（新潟大学第一外科）

帯状疱疹の発症は細胞性免疫機能の低下がウィルス（Uaricella Zoster Virus）の再活動の原因となっていると考えられ，しばしば内蔵の悪性腫瘍を合併すると報告されている．最近では抗ウィルス剤，ソリブジンとフルオロウラシル系抗癌剤の併用による副作用で死亡例が報告され，社会問題となったことはよく知られたことである．

われわれは過去10年間に帯状疱疹を合併した消化器悪性腫瘍症例を検討したので報告する．10年間の帯状疱疹例は約230例あり，うち消化器疾患は胃癌5例，大腸癌2例，胆石症2例である．帯状疱疹と胃癌の並存率は2.2％，大腸癌は0.9％，また胃癌の帯状疱疹合併症は3.3％，大腸癌は1.5％であった．これらの症例につき，種々検討を加えたので報告する．

31）気圧と虫垂炎

福田　稔・大竹　雅広（県立坂町病院外科）

平成4年2月より平成6年2月迄に112例の虫垂炎を経験した．これら症例について，気圧と虫垂炎発生の関係を調査した結果について報告する．

32）当院赴任後5年間における手術例の検討
—手術成績を中心に—

川口　英弘・三間智恵子（巻町国民健康保険病院外科）

過去5年間に当院で経験した入院手術例は834例であり，その内訳（一部重複）は胃癌144例，大腸癌94例，肝・胆・膵腫瘍40例，乳癌24例，甲状腺癌5例，胆石症（胆管結石症，肝内結石症を含む）130例，急性虫垂炎84例，鼠径ヘルニア128例，痔疾患66例，イレウス19例，胃潰瘍12例，大腿ヘルニア11例，その他93例である．胃癌全症例の5生率は67％で，70歳未満では80％であるのに対し，70歳以上では55％と成績不良であった（p＝

0.0019)．前者に比し後者に進行症例が多い（p=0.0186）ことが最も大きな理由と考えられた．結腸癌と直腸癌の3生率は，70%，75%で，両者とも年齢による差は認めなかった．膵癌症例中5年以上の生存例を1例経験した．

33）当院赴任後5年間における手術例の検討
—合併症を中心に—

川口　英弘・三間智恵子（巻町国民健康保険病院外科）

入院手術例834例を対象に術後合併症ならびに術後の経過観察中における他疾患の合併状態を検討した．腸管吻合を要した251例中縫合不全例は3例（1.2%）で，術者間に差はなかった．術後感染合併例は31例（3.76%）であった．重複癌症例は同時性6例，異時性15例の21例で，全悪性腫瘍症例の約7%を占め，膵癌・尿管癌で5年以上生存中の症例を含め8例が生存中である．胃癌で亜全摘以上の手術を施行した99例中術前に胆石を合併していた症例は7例（7.1%），術後に胆石を合併した症例は92例中6例（6.5%）であり両群に差を認めなかった（p=0.8911）．乳癌術後の胆石合併例は24例中4例（17%）で，胃切除後に比しやや高率であったが有意差を認めなかった．

34）男子乳癌を合併した原発性副腎皮質結節性異形成（Carney 症候群）症例

角田　和彦・桑原　明史
草間　昭夫・岡村　直孝
若桑　隆二・田島　健三
和田　寛治
（長岡赤十字病院外科）
広田　雅行（同　小児外科）
金子　兼三（同　内科）

1985年 Carney により原発性副腎皮質結節性異形成 primary adrenocortical nodular dysplasia（PAND）に粘膜腫を合併する症例が報告された．乳腺腫瘍も高率に合併し，今回乳癌を合併した症例を経験したので報告する．

症例は，10歳時右睾丸腫瘍，26歳時甲状腺癌（濾胞腺癌），28歳時右乳腺腫瘍にてそれぞれ切除術施行した．31歳でクッシング症候群にて両側副腎全摘術施行．36歳右乳癌［E］にて非定型根治的乳房切除術，45歳時右心房粘液種にて除去術施行．

希な症例であり，若干の考察を加え報告する．

35）術前診断が困難であった傍神経節腫の1例

多々　孝・三科　武
近藤　公男・加藤　知邦
斎藤　博・鈴木　伸男
（鶴岡市立荘内病院外科）

【症例】66歳　男性．平成6年6月6日健康診断の腹部超音波検査にて左上腹部腫瘤指摘された．自覚症状，身体所見上特に異状無く，入院後精査にて後腹腫瘍と診断，同時に肝外側区域に結節性病変指摘された．平成6年9月26日腫瘍摘出術施行．術中血圧の変動を認め，術後病理組織診断にて傍神経節腫瘍と診断された．術後大きな血圧の変動なく，経過順調，血中・尿中カテコラミン値は正常範囲であり，副腎シンチグラムにて異常集積なく，退院外来経過観察となった．

本腫瘍は副腎原発の褐色細胞腫に比して悪性の頻度が高く今後厳重な経過観察を行う方針である．

36）後腹膜原発の粘液性嚢胞腺癌の1例

武田　信夫・小山　真
北条　俊也・坂下　滉
下田　聡・伊藤　寛晃
（新潟県立新発田病院外科）

回盲部後面の後腹膜腔に原発した粘液性嚢胞腺癌の1例を経験したので報告する．症例は51歳女性で回盲部腫瘤を主訴に平成6年6月8日当科初診．腹部 CT，超音波断層検査で回盲部に 6×6×9 cm の嚢胞状腫瘤を認め内部には 1.5 cm 大の充実性腫瘤が存在しまた壁の一部には微小石灰化を認めた．腫瘍マーカーは CA19-9 が 58 U/ml と高値を示した．6月27日手術を施行した．回盲部後面後腹膜腔に手拳大の腫瘤を認め摘出した．両側卵巣および子宮に異常を認めなかった．重量 310 g，内容は暗血性泥状の粘液が充満し内容液の CEA は 798 ng/ml と高値を示した．病理組織診断では粘液性嚢胞腺癌と診断された．術後 ADR，5-Fu を中心として化学療法施行後8月4日退院現在術後5カ月再発兆候なく生存中である．

37）片腎摘出を行った両側発生腎血管筋脂肪腫の1例

横山　直行・篠川　主
鰐渕　勉・佐藤　巌
（南部郷総合病院外科）
佐々木正貴（新潟大学第一外科）

血管筋脂肪腫は腎に発生する良性腫瘍である．今回我々は両側性に発生し，右腎摘出を行った1例を経験したの